

赤い日の丸が先端に描かれたオールを翼のように広げて、細長いボートをこぎ出した。ロンドン五輪のボート代表、岩本亜希子選手(33)。埼玉県戸田市の戸田漕艇場で、ペアを組む女子選手とともに国内直前合宿を行っていた。

「少しずつ、わくわく、どきどきが高まってきた」  
出場する軽量級ダブルスカ

# 被災してない自分に罪悪感： 今は震災忘れず思い続けたい。

校1年のとき4歳年長の姉の姿に憧れてボートを始めた。大学生でシドニーを経験し、

## 故郷 被災地からロンドンへ

⑥

ルは体重59キログラム以下の2人が両手にオール(スカル)を持ち、2千メートルの直線をこいで順位を競う。日本女子の入賞はまだない。シドニー五輪から4大会連続の出場となる。

社会人として続けるに当たって仙台市に本社を置く生活用品大手「アイリスオーヤマ」のボート部を選んだ。宮城県南部の角田市にある事業所へ勤めて、10年目になる。

長野県諏訪市で生まれ、高くない人たちにめぐり会う

### ボート 岩本亜希子選手



ことができた。ほっとしたり、癒やされたり。あの人たちの元へ帰りたい、笑顔が見たいと思える人たち。第二の故郷だと思う」

宮城県のボート競技は古い伝統を持つ。東北大学漕艇部は戦前からあり、石巻市の旧北上川は秋田県の子吉川、滋



練習前にボートをチェックする岩本亜希子選手  
埼玉県戸田市の(桐原正道撮影)

賀島の琵琶湖とともに「日本3大市民ボート発祥の地」と呼ばれる。特に旧北上川は堰がないため、どこまでもこいでいくことのできる好適地だった。

東日本大震災。高校や大学のボート部員が力を合わせオールをこぐ姿が日常風景だった旧北上川は、桟橋が流れ、がれきが沈んだ。岩本選手と同じアイリスボート部に所属する須田貴浩選手(31)は石巻の実家を津波に流された。

岩本選手は「須田さんや、一緒にシドニーへ行った先輩の故郷である石巻の姿は、絶対に見ておきたい」と、試合の帰りに立ち寄った。かつて泊めてもらった須田選手の実家を探しても、見つからなかった。

「自分が被災していないことに罪悪感を抱き、思いを共有したくてもできず悩んだ。思いを受け止めすぎることはない、ボートをやってもいいんだ。ただ、震災を忘れず、思いを寄せ続けたい。そう思えるまでには時間がかかった」

岩本選手を高校時代から指導してきた日本代表の阿部肇ヘッドコーチ(49)は「誰もが震災を引きずっている。岩本も『自分にしかできない役割がある』と練習や試合へ打ち込む一方、その合間のぎりぎりの時間をを使って被災地と向き合ってきた」と話す。

シドニーで14位だった順位はアテネで13位、北京9位。ロンドンは日本女子初の8位以内入賞を目指す。

宮城県ボート協会の事務局長で、石巻で被災した印刷業、高橋真由さん(52)は「彼女のようない流選手が宮城で活動しているのも先人が築いた伝統の力だと思う」と期待する。

岩本選手は「宮城の人たちは本当に辛抱強い方々が多い。自分たちのほうがもっと大変なのに、『ボートは大丈夫なの』『トレーニングはできてくるの』と心配してくれ、『活躍する姿がうれし』と言ってくれる」と語り、こつ続けた。

「五輪は宮城の人たちの笑顔を見られる最大のチャンス。日本の代表として、宮城の代表として戦いたい」